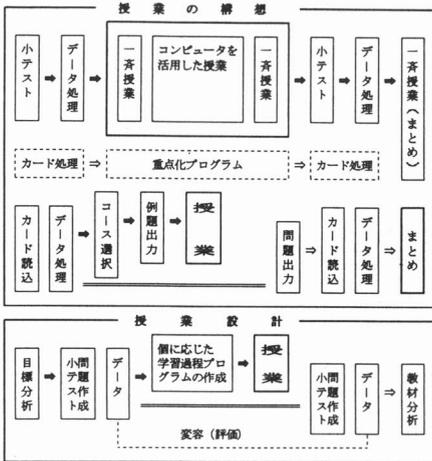


に基づき、課題を選択して学習できる。

② 教師が生徒一人一人の実態を把握し、個に応じた手だての指導ができる。

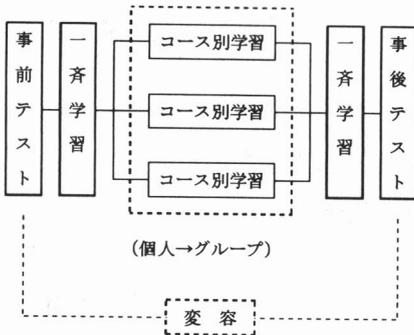
という二点と、わが校の実態を考慮して、生徒一人一人の興味・関心や習熟度の違いによってグループに分け、それぞれの役割を認識させ、主体的に活動させる場を設けて学習の個別化を図った。



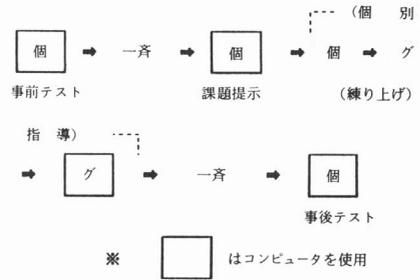
(4) 授業のモデル

習熟度モデルと興味関心モデルという二種類を考えた。どちらも生徒の実態把握をもとにグループ分けをする点と、一斉学習を前後に行う点は共通である。本稿では習熟度モデルによる数学の例を取り上げる。

習熟度別モデル



(5) 学習形態の工夫



(6) 課題提示の工夫

- ① どのコースも始点と終点は同じ(意欲)
- ② 問題の記述の違い(読解力)
- ③ 問題数の違い(解く速さ)
- ④ 小問のステップ数の違い(理解力)
- ⑤ ヒントの内容や記述の仕方(思考力)
- ⑥ フィードバックのさせ方の違い

(7) 練り上げ

個人→グループ→一斉とフィードバックによる練り上げをする。

(8) ワークシートの活用

思考、まとめ、定着のために併用する。

(9) 事前・事後テスト

OMR (Optical Mark Reader) を用いて時間を短縮し、類型化を図りやすくした。

(10) 教師の個別指導

従来は遅れている生徒がいると、ほとんどその生徒にかかりきりになってしまうが、コンピュータを活用することにより、多くの生徒を援助することができるようになった。

(11) 授業の実際

授業の例として、1年生の作図のまとめの問題(既習の4種類の作図を使って終点を見つける)をあげる。

指導過程を次に示す。